

の同学に教導を抑ぐべく、「鎌倉時代語研究」誌を創刊して号を重ねて来た。第四輯からは更に装いを新たに、活版によって公刊することになった。鎌倉時代語研究会は、又、昭和五十二年以來、色葉字類抄を中心とする当代の語彙蒐集をも続けて来ている。幸い、先般文部省科学研究費を拝受する機に恵まれ、その成果の一端を別に発表し、更に多くの諸賢の御誘掖を抑ぐべく力めても来た。

鎌倉時代語の研究に至る入口は、種々あるであろう。われらのこの歩みは、基礎作業を志向しつつ行、その僅かな一つの、試みの集いに過ぎない。しかし小さな一つ一つの積重ねこそ、斯の道には必要であろう。本誌が、新しい分野を開拓するための土壌作りの役に立つことを秘かに念じ、且つ、多くの他の入口よりする研究が様々に現れ、実ることを期待するところである。

昭和六十二年三月

小林 芳 規

目次

巻頭言

鎌倉時代語研究の課題	小林 芳 規	一
鎌倉時代和文について	東 辻 保 和	四
「む」「ん」の文字遣をめぐって	山 内 洋 一 郎	六
梅沢本に見られる『栄花物語』の成立・転写の様相	菅 原 範 夫	八
——表記・音便形の特徴を中心にして——		
世代差と表記差	金 子 彰	一〇三
——院政後期・鎌倉初期書写の仮名書状のハ行音表記を視点として——		
古文孝経の訓読における字訓について	松 本 光 隆	一三六
読誦漢音に於ける学習音の介入——蒙求字音点の場合——	沼 本 克 明	一五八
呉音一音節去声字の上声化の過程	佐 々 木 勇	一八五
京都女子大学蔵表白集解説並びに影印	山 本 真 吾	二〇九
観智院本「三寶繪詞下」漢字索引	広島大学国語史研究会	三〇五
会員近著紹介		四三
鎌倉時代語研究集会記録		四三
「鎌倉時代語研究」(第一輯〜第九輯) 目次		四四

- (10) 注(7)日本古典文学大系所収歎異抄の頭注。
 (11) 吉田金彦「今昔物語集における推量語「むず」「むとす」の用法」(訓点語と訓点資料第十九輯、昭和三十六年十一月)。
 同「中古・近古における推量語「むず」・「むとす」の用法」(国語と国文学、昭和三十七年三月)。
 (12) 佐藤喜代治「文章研究の意義と方法」(国語学第二十五輯、昭和三十一年七月)。
 (13) 安田章『岩波日本語7 文法II』の「助詞②」のうち「副助詞」の「バシ」(三三七頁)。
 (14) 拙稿「副助詞シ」(『現代語助詞助動詞詳説』昭和四十四年四月、再録)。
 (15) 拙稿「古代の文法II」(『講座国語史 文法史』昭和五十七年十二月、二七三頁)。
 (16) 土左日記の十二月二十四日の「一文字をだに知らぬものしが」の「し」の解釈には諸説があるが、これを助詞「シ」と見れば、(イ)以外の用法となる。しかし、本来連用語の性格の強い「シ」が主格助詞の「が」に上接した例は、他例がなく、上代語の「シ」がこの時期には変質し始めていることを物語るものと考えられる。
 (17) 日本古典文学大系所収本の頭注では、「シは接頭語。意味不詳」とされる。
 (18) 『平家物語の語法』一五七二頁。
 (19) この「ばし」を認めることによって、更級日記の成立を鎌倉時代に下げようとすることは、御物本の存在とその内容から見て首肯し得ない。
 (20) 森野宗明「中世物語説話の表現」(『日本の説話7 言葉と表現』昭和四十九年十一月)。
 (21) 注(20)文献。
 (22) 拙著「角筆文献の国語学的研究」七六一頁。
 (23) 拙稿「猿投神社蔵古文孝経建久六年点における地方語的性格」(『藤原与一先生古稀記念論集』方言学論叢II 方言研究の射程』昭和五十六年六月)。
 (24) 拙稿「国語史研究資料としての中山法華経寺本三教指帰注」(『中山法華三教指帰注』総索引及び研究』昭和五十五年八月)。
 (25) 拙稿「将門記承徳点本の仮名遣をめぐって」(国文学攷第四十九号、昭和四十四年三月)。
 (26) 注(22)拙著、第三章第二節第二項、三二七頁。
 (27) 拙稿「国語史料としての角筆文献」(『築島裕博士国語学論集』昭和六十一年三月)。注(22)拙著、七六八頁。

鎌倉時代和文について

東 辻 保 和

目 次

はじめに

第一節 鎌倉時代前期

第二節 鎌倉時代後期

結びに代えて

はじめに

和文は、平仮名文とも漢字交り平仮名文とも呼ばれるのであるが、一般に次のように規定される。^①

和文体の文章。和語を使用し、平仮名で表記される様式の記事。和文体とは、漢文体や和漢混淆体など対立する古典的文章体の一様である。平安時代の語彙と語法とを規範とするが、普通は、散文表現についていう。

又、具体的には、伊勢物語、庵主、太后御記、篁日記、蜻蛉日記、紫式部日記、和泉式部日記、更級日記、讃岐典侍日記等が「殆ど純粹な和文的なもの」とされている。^②

平安時代後期以後、話しことばと書きことばとが次第に離れてゆく時代において、平安時代和文の流れを汲む和文体文章は、平安時代和文の語法・語彙を模範として作られる擬古的文語文となる。それゆえに、もっぱら新しい時代の言語の語法・語彙等を研究の目的とする立場からは、和文は魅力の乏しいものとならざるを得ないであろう。既に、根来